

9世紀の韓・中・日の海上貿易における清海鎮に 関する小考*

韓洛鉉** · 朴明燮*** · 金炳助****

-
- I.はじめに
 - II. 9世紀における韓・中・日の間の海上貿易と清海鎮
 - III. 韓・中・日の間の海上貿易における清海鎮の役割と意義
 - IV. おわりに
-

I.はじめに

国際物流的な側面から見た時、グローバル企業は大陸単位の拠点物流管理体系を構築して、これらの拠点を連携するネットワークを通じて国際物流を管理しながら国際物流管理を専門物流業社に委託することにより物流管理の効率性を追い求めている。このようにグローバル企業の拠点物流体系の強化によって、各国は国際物流の

* 本研究は、2006年度に日本港湾経済学会全国大会(場所: 横浜)にて発表したものを加筆・修訂したものであること を附記しておきたい。また本研究は、2007年度の慶南大学校・学術研究奨励金の支援により行われたものである。

** 慶南大学校 経済貿易学部 助教授

*** 成均館大学校 経営学部 教授

**** 成均館大学校 大学院 博士課程

ハブ化を国家経済発展の主な戦略として採択するなど、物流の主導権の確保のための物流拠点化の競争が激しくなっている。特に韓・中・日の3カ国は歴史的な特殊関係と地理的な隣接性、経済的な補完性、文化的な同質性を共有している。特に、韓半島は地政学的に東北アジア経済圏の中心地に当たる。

開発途上国の経験を持っている韓国は、先進国と後進国—資源・労働力が豊かな国家と、資本・技術が発達した国家—を連結する架橋的な役目を遂行することができる。すなわち、東北アジア経済圏を構築するのに韓国の経済開発ノウハウは重要な役目ができるということである。先端技術と資本を取り揃えた日本と、世界の市場と同時に工場として浮び上がっている中国をつなげる架橋の役目がちょうどそれである。特に海を通じた韓・中・日の経済協力関係を図ることも重要な課題の一つであると言える。

これのためには、各国のリーダーおよび専門家がよく集まって共同の利益を追い求める方策を模索しなければならない。このように海の問題の解決は東北アジアの国々の協力時代を開いて行く重大なカギである。このような状況の大切さを勘案する時、9世紀の中葉に、清海鎮を中心として東アジアの海洋商業帝国を構築した張保臯の海商経営活動は、今後の韓国が志向しなければならない国際貿易ネットワークの構築とも相当の部分が連携されている。もちろん当時の貿易および経済環境が、今日の環境とは多くの差があるが、競争が

深くなっているグローバル貿易経済環境において張保臯が着目した清海鎮を中心にしたボーダーレスな超国家的な海洋経営モデルは国際貿易の観点において示唆するところが大きいと言える。

一方、張保臯に関する既存の研究としては、朴明燮(2005)、韓国海洋水産開発院(1998)、三星経済研究所(2004)¹⁾等があるが、これらの研究は、主に張保臯と国際物流、張保臯と海上活動等を中心に研究しているのに対し、本研究では張保臯が活動していた青海鎮の役割と意義を中心に分析しているのに、その差があると言える。

本研究では、今後の東北アジア経済圏の海上貿易の活性化のために、過去9世紀において張保臯が成した清海鎮を中心にした韓・中・日の間の海上貿易を考察

1) 朴明燮, “張保臯の海洋ネットワーク経営の再照明を通じた東北アジアのハブ港湾の構築に関する研究,” 「貿易商務研究」, 第27巻, 韓国貿易商務学会, 2005 ; 韓国海洋水産開発院, 「張保臯の海上活動の再照明と21世紀の海洋思想の鼓吹方向」, 韓国海洋水産開発院, 1998 ; 三星経済研究所, 「千年前のグローバルCEO, 海商王の張保臯」, 三星経済研究所, 2004.

して見ることにより、韓・中・日の間の海上を通じた貿易の歴史的な教訓を提示して見たい。

Ⅱ. 9世紀における韓・中・日の間の海上貿易と清海鎮

1. 清海鎮の設置背景

張保臯は莞島出身で、幼い頃から海に慣れていて、それに基いた自分の能力と努力を生じて、唐の国において軍人として出世することができた張保臯としては、自然に山東半島を中心とした海上活動に関心をもつようになったのである。さらに、張保臯は海賊らの掠奪行為による被害とか、そのような被害を予防しようとする必要性を誰よりも深刻に感じるようになった。しかし、これだけでは張保臯がなぜ清海鎮を設置するようになったのか、清海鎮の設置の背景が何であったかは分らない。海賊らの掃討と安定的な航海・交易等を確保したからには、張保臯が山東半島を中心に活動する場合にも、ある程度は可能であったからである。

それにもかかわらず、張保臯は唐の国においての活動を整理してから帰国して莞島に清海鎮を設置したのである。張保臯が唐の国で活動していた時、海賊らが新羅人を掠奪して奴婢として売ってしまう等の行為をすることを防ぐため、興徳王3年(828年)に帰国して、国王に清海鎮の設置の申し立てをしたと伝えており、その時、興徳王(826～836年)は、張保臯の要請を受け入れたという。このような短い記録を通じて、清海鎮の設置背景を張保臯身からの活動とか当時の時代状況と関連して、いくつかに分けて考えて見ることができる。

一番目は、新羅坊・新羅所等を中心とした山東半島に存在していた新羅の勢力と、それに基盤を置いた張保臯の海上活動の経験があげられる。前述したように、新羅人は早くから中国との交易のために積極的な海外進出をしていた。当時の唐の国は、世界的な帝国として、先進文物の産室であると同時に、西洋世界との交渉の窓口役割も遂行していた。このような点が新羅人にして、唐の国との交易や中国大陸地域への進出に積極性をあびさせたのである。

したがって、東北アジア一帯の海上貿易を主導していた清海鎮の設置は、

① 新羅人の積極的な海外進出と,

② その時代, 東アジアの国際社会において必要な対外交流と海上貿易の重要性を把握した張保暉の 歴史の認識および個人的な能力,

③ そしてこのようなことを総合的に結合して, 適切に活用することができた山東半島地域において新羅社会の地力があつたからこそ可能であつたのである.

二番目は, 新羅社会および中央政府がその必要性を感じていたという点を指摘することができる. 当時, 新羅の政治的状况は, 何回もの政治的な混乱の中で即位した恵恭王(765~780年)以降, 眞骨という貴族の間で王権を囲んだ争奪戦が深化されてきた. したがつて新羅国王のあり方は, それ以前の時期に比べ, 相対的に 弱体化されていた. 特に, 憲徳王(809~826年)は, 自分の甥である哀莊王(800~809年)を殺して王位に即位した人物であつた. このような極端的な場合のことまで経験することにより, 新羅の王権を囲んだ貴族勢力の戦いはさらに熾烈となつた. それにより, 国王の統治行為や中央政府の行政は, 国家と民のためではなく, 政権を 握るための闘争に多くのものを浪費してしまつたのである. したがつて, 自然に民生のための政治は, 疎かになるしかなかつたのである.

政権の争奪戦に重点を置いていたので, 自然災害に悩まれている民について碌に面倒を見ることができなかつた新羅の中央政府としては, 清海鎮を設置しようとする張保暉の提案を疎かにすることができなかつたであらう. 中国での張保暉の活動をすでに知つていた新羅の中央政府は, 張保暉が清海鎮を設置して海上貿易の主導権を掌握することにより海賊を掃討し, さらに交易とか民の被害を妨ぐことができるならば, それが政権や国家のために好しいものであると判断したに間違いない. 張保暉の活動により経済的な利得だけでなく, 民心の安定を図ることができるならば, 一挙兩得なわけであるからである. そういふことで, 興徳王は気軽に1万人の軍人を支援し, 張保暉に清海鎮の設置を支援したものと判断される.

三番目は, 清海鎮の設置の背景と関連し, 張保暉個人の意志と愛国心に大きな比重を置かなければならない. 莞島出身の張保暉は, 平素, 海にも慣れていたが, 中国へ渡つた後にも, 騎馬と槍術に優れて対敵することができるものはいないほどであつた. 張保暉は, このように優れた武芸を裏付にした軍人として, 相当な出世をした人物であつた. また, 海上貿易に関心を持ち, 軍隊から引退した以降も, 山東半島を根拠にして 相当な勢力を形成した人物である. したがつて, 新羅の出身として, 唐の国において名誉とともに経済的にも成功した人物であつた.

これは、張保臯が、海賊により唐の国へ引っ張られてきた同胞が奴婢の身になって苦勞していることを直接に見て、それを防止しなければならなかつたという考えをもっていたことを知せてくれる。唐の国で武将として名声をあげ、また山東半島を中心に海上活動を展開した経験のある張保臯としては、同胞のそのような苦勞をそのまま見ていられなかつたのである。さらに、張保臯としては与件さえ与れば、海賊の掠奪行為を防止する充分な能力を整っていた。しかし、唐の国での張保臯は、海上貿易活動を活発にする商人の位置にあっただけで、政治的・軍事的にその問題を解決する地位には至っていなかつた。

多分、このような意志と同胞愛があつたからこそ、張保臯は新羅国の次元で海賊の掠奪行為を防止しなければならなかつたという考えをもっていたかも知れない。すなわち、張保臯は、自分の能力を自分自信の幸せと成功だけのために使わずに、国家的・民族的な次元で苦痛を受けている同胞を救って、国の経済を復興させようとしたのである。そしてその方法をもって国家の認定を受ける軍鎮を設置し、自分自信が管轄することにより、海上交易の安定を図って、新羅に対しての海賊の経済的・人的な掠奪を予防しようとしたのである。

このようにいくつかの点が、張保臯が清海鎮を設置することになった背景であつたと判断される。ここで張保臯の清海鎮の設置がもつ新羅史における意味と、歴史上の意味を正確に理解することによりひとつの教訓をえることができると思われる。²⁾

2. 東アジア(韓)・中・日)貿易体制の変化

8～9世紀に起きた貿易体制の変動は、新羅の張保臯を中心にした海上勢力が擡頭することができるようにしたもう一つの背景となつた。貿易体制の変動と言うのは、公貿易が後退して私貿易が大きく活性化された流れのことを言う。3国の統一戦争の過程において黄海の横断および東シナ海の航路が開拓され、既存の沿岸航路とともに東北アジアの海岸路は大きく拡がっていたが、統一直後の7世紀後半には、戦争の後遺症により新羅・唐・日本の間に政治的・軍事的緊張関係が造成され、平和な貿易活動もしばらく活性化されることができなかつた。しかし、8世紀に入って渤海が建国されるなど、その変数が作用して東北アジア社会に解氷ムードが造成されながら、東

2) http://www.changpogo.or.kr/main.asp?CMenu=1&Cgubun=1&CPage=depth_03_01.html

北アジアの海上貿易活動は新しい全盛期に入った。すでに統一戦争の過程において黄海横断航路が本格的に開通した状況であったので、8世紀に再開された東北アジアの海上交易はその質と量で沿岸航路時代のそれをずっと凌ぐものであった。³⁾

当時、新羅・唐・日本の3国は、共通的に皇帝あるいは国王を中心とした強い中央集権的な国家体制を構築していたので、3国間の貿易は国家の力強い管理と統制を受ける公貿易が中心を成した。その公貿易を媒介にして活性化させたものが、新羅の遣唐使、遣日本使らであった。新羅の遣唐使は唐に泊まり、外交活動を広げながら唐の許容の下で珍しい唐物らを購買して新羅へ持って来た。この唐物の一部は新羅で消費し、残りの一部は新羅物と一緒に遣日本使を通じて日本へ輸出していた。公貿易の旺盛で一番得したのは新羅であったが、この時期に新羅が政治的・文化的に最高の全盛期を謳歌することができたことも、公貿易のメリツのためであったと言える。⁴⁾

しかし、このような公貿易体制を維持するためには、国民の私的な購買欲求を統制することができる力強い王権が前提とされなければならないが、8世紀後半から東アジアの3国で、まったく同様に王権が瓦解される兆しが現われ始めるようになり、公貿易のみを維持することが難しい状況に至るようになった。⁵⁾ このように公権力が弱体化されながら、私貿易を統制することができなくなり公貿易が衰退したわけである。さらに海洋秩序さえ崩れて、海賊集団が横行しながら公貿易であろう私貿易であろう海洋を通じた貿易自体が難しくなる最悪の状況が発生することになった。⁶⁾

3) 徐青錫・朴鉉瑀, 「韓国貿易論」, 法経社, 1994, p.63.

4) 姜奉龍, 「韓国海上勢力の形成と移り変わり」, 海上王張保臯記念事業会, 2006, p.5.

5) 唐の場合、755年に起きた節度使の安録産の乱を基点にして、皇帝権に挑戦する節度使の跋扈が全国で並んだし、農業生産力の発達により均田制が崩壊して、商業流通経済が発達する経済的变化が起きながら、地方に対する唐の王朝の統制力は急速に弱体化されて行った。新羅の場合、8世紀後半から貴族の反乱と王位争奪戦、それから地方勢力の脱王権化の傾向の加速化などで、中央政府の統制力が喪失された。日本の場合も、8世紀後半から皇室の外戚勢力が得勢することを始発点として、地方で壮元が現われることになり、これによって独自勢力を成した豪族が擡頭した。

6) 唐の場合、喪失された統制力を回復するために、有力な地方藩帥に貿易を委任するなどの便法を使ったりしたが、結局、地方勢力の基盤をさらに育ててしまっ唐の王朝を威脅するような結果となった。

3. 新羅・唐・日本の間の海上貿易

新羅と日本の間の貿易において活動した新羅人だけでなく、唐との貿易でも在唐新羅人の活動が旺盛であったが、新羅出身として唐に泊まって生業に携わっていた人々を在唐新羅人と言う。新羅商人の大部分は、唐と日本を往き来して対日・対唐の貿易に携わった。在唐新羅人は新羅の在外国民の一種である。したがって、在唐新羅人は今日の在外国民の概念に準じて定義することができる。すなわち、現代の法制的観点から在唐新羅人を規定すれば、新羅出身として唐へ渡って永住あるいはそれに準ずるほどの長期滞在を目的に、そこに定着して生業に携わりながら暮していた本人と直系卑属に対する総称と言える。このような在唐新羅人は、現在の在外国民と同じく帰化の可否によって、二つの部類に分けられるが、唐に帰化した新羅系唐人と、帰化しない新羅国籍人がそれである。在唐新羅人の社会はちょうどこのような人々により構成・運営された。

張保臯が日本で活動していた貿易基地は、今の福岡県西北部地域である筑前国博多津であった。昔から博多津は韓半島・中国大陸との関門の役目をしたこともあって、日本はその大切さを勘案して大宰府という特別官庁を設置した。そして大宰府の中に鴻臚館⁷⁾を置いて、国内外の使節と外国商人を応待した。

また日本の対外貿易は8世紀後半を基点にして、その性格が公貿易から私貿易へとその中心が変わりながら、大宰府が日本の対外貿易の中心地に浮び上がることにより、大宰府の外港であった博多津は国際貿易港として盛んになった。820年から840年代の初期まで、ここを尋ねた外国商船の大部分は、張保臯の貿易船団に属した船であったので、博多津は張保臯の貿易基地であったと言える。

博多津が張保臯の貿易基地であったと言っても、清海鎮や漣水県とは違い大規模の船舶と人員が滞留して商業に携わったことには見えない。当時、日本朝廷の方針は外国商船が到着し商品の売買が終わるとすぐ、それらを返すのが常例であったからである。

このように張保臯は新羅と唐、そして日本に自分の貿易基地を置き、船舶と人員を常住させて国際貿易を広げた。言い換えれば、張保臯は新羅の清海鎮を国際貿易

7) 貿易や外交関係を遂行する目的で、日本へ入国する者のために、大宰府内に設置した宿所の概念である。ところで、大宰府と瀬戸内海の地域に混乱が生じ、842年8月に新羅人の入国を禁止して、“鴻臚館”での新羅人との貿易関係を閉鎖してしまったのである。

のセンターにして、唐の漣水県および日本の筑前国博多津を海外基地にして、東アジアの3国の海上貿易を主導して行ったのである。

1) 対日貿易航路

一般的に唐・日本の交通路には南路と北路があったと言う。北路は難破-瀬戸内海-下関-百済沿岸-黄海-登州につながるものであって、一方の南路はたいてい博多-五島列島-東中国海-長江口につながる交通路であった。この二つの交通路は距離においては、南路の方が北路の方より短い。それだけでなく、停泊する所の多い北路は費用と日々がかなりかかる一方、南路は費用と日々がそうかからない。そのため、日本は死活をかけて南路を開拓しようとしたのである。そして、その時期は701年以降で、日本が新羅との関係の悪化により新羅の領海を通過することができなくなることになり、それによって自体的に開発した航路が南路であった。8世紀に入りながら日本が南路の開発をしたとは言っても、それは北路の方より大きな危険を伴っていたため、今までの多くの経験を通じて北路の利用が安全を保障する交通路として認められていた。

2) 対唐貿易航路

韓半島と中国大陸を連結する古代航路は、北中国航路と南中国航路に大きく分けることができる。北中国航路は、遼東半島と韓半島の沿岸を経る沿岸航路と、山東半島および黄海道の間を直接横断する黄海横断航路に分けられる。一方、南中国航路は、中国南北部の沿岸や韓半島の西海岸にそって往来する沿岸航路と、中国本土と韓国南端の間に横たわった東中国海を横切る航路に分けることができる。ところで、北中国航路の中で遼東沿岸航路は、山東半島北部と遼東半島の最短距離である老鉄山水道を必ず渡らなければならない、一方南中国航路の中で北方経由航路は、中国南部から沿岸に沿って山東半島まで来て、二つの分岐点の北中国航路の中でいずれか一つを経らなければならなかったのである。したがって、これらの北中国航路と南中国航路は、老鉄山水道経由の航路や黄海横断航路を含む北路と、東中国海斜断航路を含む南路に整理することができる。

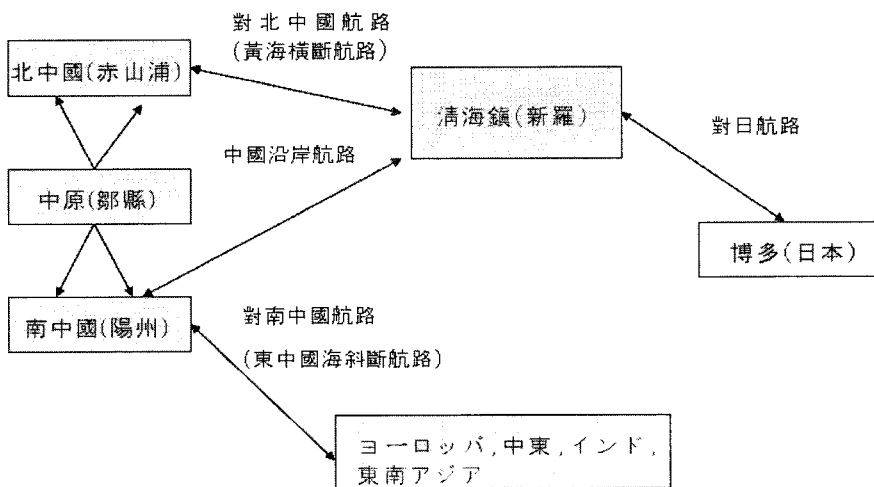
このように唐と日本がいわゆる北路(渤海路)を利用することにより、もちろん独自の航海があったはずであるが、一般的に百済人あるいは新羅人が同乗して、その案内に従って航海していたということは航海術の未発達という問題もあったのであるが、まだ沿岸航海の範疇を大きく脱することができなかったということを物語っている。そこで、特に

韓半島の西南海岸での引き潮と満ち潮の作用と、地形についての知識が不足したため海路を熟知している新羅人を同乗させたと考えられる。

4. 清海鎮における東アジア貿易の活動

清海鎮を中心にした貿易モデルは、ただ韓・中・日を連結する国際間の3国間貿易に止まらなかった。清海鎮は新羅・唐・日本の航路の中心であるのみならず、ペルシア・印度・タイなどといった東南アジアと、中国東南部を連結する南洋航路と北東アジア航路の連結の輪であった。中国内の南北間の貿易を担当したもの以外にも、さらには浙江省、福建省および揚子江の一带に進出していたペルシアおよび東南アジアの商人との地域分割的な商取引も主導していた。張保臯の海商経営の拠点は、清海鎮を中心に山東半島、赤山浦、会案、揚州、日本の博多へ至っていた。このような韓半島の南海岸を中心に広がっている海上権は、また中国南方とも連携されており、さらに遠くアラブ商人とも間接交易がなされ、海上シルクロードが韓半島まで繋がれる効果を作ったものと推定されている(〈図 1〉参照)。

〈図 1〉 清海鎮の東アジア貿易の領域



出所：三星經濟研究所，前掲書，p.66.

今日、新羅の遺跡から発掘されるアラブ製品は、‘海上シルクロード’を通じて流入されたものもあって、統一新羅以後、韓半島の海上活動は実に幅広くて‘海上シルクロード’が中国・明州で終わったのではなく韓半島まで延長されたということを物語っている。

Ⅲ. 韓・中・日の間の海上貿易における清海鎮の役割と意義

1. 清海鎮(国際貿易基地)構築の考慮の要因

新羅・唐・日本といった東アジアの三国を舞台にして国際貿易に携わった張保臯は、あちらこちらで自分の貿易基地を構築した。その中で、張保臯が国際貿易を統べたセンターは、前述したように、今の全羅南道・莞島にある清海鎮であった。清海鎮は興徳王3年(828年)に張保臯の申立てにより、当時黄海と南海を横行しながら新羅人をつかまえて唐に奴婢として売っていた海賊を退治するという名分で設置した軍陣であった。清海鎮の設置と同時に、鎮の大使に任命された張保臯は自分の軍事力を基盤として海賊退治はもちろん、そこを自分の海上貿易の中樞基地として活用した。⁸⁾

1) 自然的・地理的な要因

張保臯が清海鎮を貿易基地の中樞にしたことにはさまざまな理由があった。その中で、優先的にあげることができるのは、莞島の自然的・地理的要因である。韓半島の西南端の多島の海上に位した莞島は、黄海と南海を往き来する海上交通の要衝地であった。9世紀に新羅・唐・日本を比較的に安全に往き来しようとする船舶は、大概莞島近海を経由する海路を利用した。もちろん唐と日本を往き来する海岸路では、莞島を経らないいわゆる南路と南島路があったことはまちがいないが、日本遣唐使の例で見られるように、その海路では遭難と難破の危険が多くて、不可避な場合ではなければ航海を憚る忌避航路であった。⁹⁾ ということで、当時、清海鎮は新羅・唐・日

8) 朴明燮 外, “張保臯大使の海洋経営モデルに照して見た東北アジアの物流ネットワークの構築方向,” 「海洋ビジネス」, 第4号, 2004, pp.19-20.

本の三国の海路上の要衝地であったわけである。

莞島は航路上だけではなく、新羅・唐・日本の貿易都市と、距離上の中間に位置しているという利点を持っていた。東の方では新羅・慶州の外港の役目をしていた蔚山湾と、日本の対外貿易を統べた筑前国博多津、そして西の方では唐の国際貿易港として盛んだった楚州・陽州・明州・杭州などがあった。このように莞島は、三国の国際貿易都市の中間地点に位置づいていたので、国際中継貿易センターとして相応しかった。また莞島の周りに散らばっている多様な島々は莞島の自然的防御線の役割をしていたのである。¹⁰⁾

2) 人文的・地理的な要因

次は莞島の人文的・地理的な要因である。多くの人々が指摘しているところによれば、莞島出身である張保臯は地域的つながりを利用して、莞島の一帯で手軽に多くの人々を自分の傘下に引き入れて、お互いの結束力を強固にすることができた。また莞島は首都・慶州から遠く離れた西南海の辺方にあるため、中央の干渉と統制から比較的に自由であった。このような自然的・人文的な要素を考慮して、張保臯は莞島に清海鎮を設置して、そこを自分の国際貿易センターに活用した。

清海鎮で国際貿易を統べた張保臯は、唐と日本にも貿易基地を構築した。唐に建てられた貿易基地と思われる所の中の 하나가、楚州から東北方へ約35kmも離れた淮水の下流の北岸にある泗州・漣水県である。そこには新羅人の集団居住地である新羅坊があるが、その新羅人の中では海運業に携わる人が多かった。

淮水の下流に位した漣水県は水上交通の要衝地であった。西の方へ淮水をさかのぼれば、当時の貿易都市の楚州と泗州に至ることができ、また泗州から西北方へ黄河をつなぐ運河である汴河を利用すれば、汴州を経て落陽と長安まで容易に行くことができた。そして南側では楚州から山陽流にそって長江河口の国際貿易都市である陽州へ行くことができたし、また陽州で運河と海を利用すれば、明州と杭州を往き来することができた。一方、東の方の淮水に注いで下れば黄海に会い、また黄海北沿岸に沿って上がれば登州であり、東に横切れば新羅と日本へ行くことができた。

9) 日本遣唐使の中国の往来現況を見れば、遣唐使は総17回派遣されているが、その中で入唐時に3回、帰国時に4回も遭難または難破にあった。その中で、659年に遣唐使が北路を通じて帰国する途中、遭難に遭ったことを除いた残りの6回の遭難は、すべて南路と南島路で発生した(森克己「遣唐使」,至文堂,1966)。

10) 金聖培,「張保臯と長途清海鎮の遺跡」,「島嶼文化」,1998。

このように漣水県は水路を利用して、その当時、屈指の国際貿易都市である楚州・陽州・明州、それから政治と文化の都市である落陽・長安を往き来することができたし、海路を通じて新羅と日本を容易に往き来することができる地理的条件を取り揃えた所であった。なおかつそこには海運業に携わる新羅人が大勢集まって住んでいた。張保暉はこのような自然・人文・地理的な要因を勘案して漣水県を自分の貿易基地として開発、活用したのである。¹¹⁾

2. 清海鎮を中心にした貿易

1) 清海鎮貿易の性格

現代貿易学では、物品を取引する主体・対象・方向・方法などにより、貿易を多くの形態に分類している。すなわち、貿易の取引主体による区分として民間貿易と国営貿易があり、また貿易の対象である商品の生産段階あるいは特殊形態による区分として有形貿易と無形貿易および水平貿易と垂直貿易がある。そして商品の移動方向と流通経路による区分として輸出貿易と輸入貿易、直接貿易と間接貿易、中継貿易と仲介貿易、陸上貿易と海上貿易および沿岸貿易と河川貿易などがある。さらに取引方法による区分として加工貿易と受託加工貿易、バーター貿易と双務貿易などがある。

約1,200年前、張保暉が行った貿易は今日の貿易形態と、必ずしも一致するように規定することはできない。しかし概略的に比べて見ると、張保暉の国際貿易は民間貿易でもあるし有形貿易でもあり、しかも水平貿易よりも垂直貿易に近い。そして主に海を通じた海上貿易であったし、貿易業務を第3者に委任しないで貿易当事者である張保暉の船団人が直接担当する直接貿易でもあったし、外国の商品を原型そのまま第3国に再輸出する中継貿易でもあった。

このような性格を持った張保暉の国際貿易は多様な分野を扱っていたことがわかる。その中でも中継貿易を通じた商品流通業と海上運送業が主な業種であったと思われる。物品と用役の取引あるいは交換を中心にした貿易において一地域の物品を他の地域に輸送・販売して、その差益を残す商品流通業は貿易において一番基本的な行為である。張保暉の国際貿易も例外ではなく、唐の物品とそこで取引されていた西

11) 李成市,「東アジアの王権と交易」,青木書店,1999.

域と南方の商品を新羅や日本へ輸送・販売していた。それだけでなく張保臯の貿易船団は新羅と日本の特産物を唐へ持って行って販売したものの、これは張保臯の貿易において大きい比重を占めなかったと思われる。¹²⁾

張保臯が新羅と日本に販売していた物品の内容と数量などに関しては、具体的に知られているところはない。ところが、張保臯が活動していた時期の新羅と日本では、贅沢風潮と外来物品の選好意識が広まっていた。日本では、831年に太政官から太宰府へ公文書を送って、民間の外来品の購買取り締まり領を出したし、834年に新羅では興徳王が教書を出し、贅沢をこととして外来品のみを崇尚する社会風潮を警戒し、身分による物品の使用規定を制定した。

830年代に入って、新羅と日本において急に贅沢と外来品の選好風潮が社会問題として擡頭したことは、長期間の平和と全般的な経済水準の向上など、さまざまな要因があったが、その中で一番直接的な要因は、民間貿易の旺盛による外来品の大量輸入であった。公貿易に主に寄り掛かった時期に外国の珍しい物品を享受することができるものは、王室と極少数の貴族階層に限定されていた。しかし民間貿易の活性化により外来品が入って来るようになり、ある程度の経済力さえあれば誰も容易に外来品を購入して使うことができた。

2) 貿易活動とその取引の品目

清海鎮を基地にした張保臯の船団は、単純に貿易業務だけに携わったのではなく政府間の貿易の代行、3国間政府の公式使節団の案内、旅客運送、船舶建造と修理、韓・中・日本語の通訳および船員の提供、宗教・文化の支援、シルクおよび青磁開発の貿易など、各種の商業サービスおよび文化事業にまで兼ねて遂行していた。それらは広範囲な地域、長期間の物流期間などといった困難にもかかわらず、取引を初期の信用取引の次元にまで高度化させたことと推測される。すなわち新羅の商人と日本の中間階級の役人の間に代金を先に支払い、後に商品を引受ける信用取引方式が一部定着していたことが分かる。¹³⁾

清海鎮は国際的水準の海上交易基地らしく多様な品目を扱った。唐の朱丹、薬剤、工芸品、陶磁器、書籍と、ペルシアの香料、象牙、宝石類、カーペット、ガラス

12) 金成勲 外、「張保臯と東北アジア経済の中心戦略」、博英社、2005、p.8.

13) 朴明燮 外、「東北アジアの古代海上貿易制度に関する考察」、「国際貿易研究」、第8巻第1号、2002、p.4.

製品までを取引したという記録がある。〈表 1〉は、当時、張保臯の船団が流用させた品目の多様さをあらわしている。

清海鎮は海外交流品目の売買や取引のために各地域の市場を積極的に活用した。まず西側のイスラム商人の北方進出の限界線は陽州であった。彼らが持って来た珍しい本や南方の文物を唐の主な消費市場である落陽、長安などへ輸送するために陽州、楚州等に集結された。唐の内部でもこんな商品の一部運送は新羅人の分け前であった。それだけでなく、新羅と日本に交易される貨物輸送はほとんど新羅人の分け前であった。また唐、日本、ペルシアの商人から流入された文物の売り口を開拓することを目的として、ふろしき包み商売法、5日市場、7日市場のような在来の市場を活用したりした。

〈表 1〉 新羅の国別の輸出入の品目

区分	唐	日本	イスラム	東南アジア
輸出品	金, 銀, 絹, 金銀細工品, 牛黄, 人蔘, 馱馬, 牛黄, 金の帯, 海豹皮	金, 銀, 鉄, 穀物, 刀, 金銀工芸品, 高級絹, 虎豹皮, 馬, 犬, らば, 駱駝, 薬物類, 皮革, 屏風, 仏像, 塗料	木棉, 絹, 剣, 鹿茸, 蘆薈(アロエ), 馬の鞍, 豹皮, 陶器, 肉桂, 人蔘, 樟脳, 生姜	
輸入品	工芸品, 絹織物, 高級絹, 衣服, 金の帯, 銀器, 銅づくりの鏡, 金銀細工品, 磁器, 茶, 漆器, おうむ	黄金, 絹織物, 木棉, 糸	襟巻の毛, 金銀の糸, 孔雀のしっぽ, 川蟬の毛, 青海亀, 紫丹, 枕向, 香料, 硫黄	紫丹, 枕向

出所：三星経済研究所，前掲書，p.63.

3. 清海鎮の性格と意義

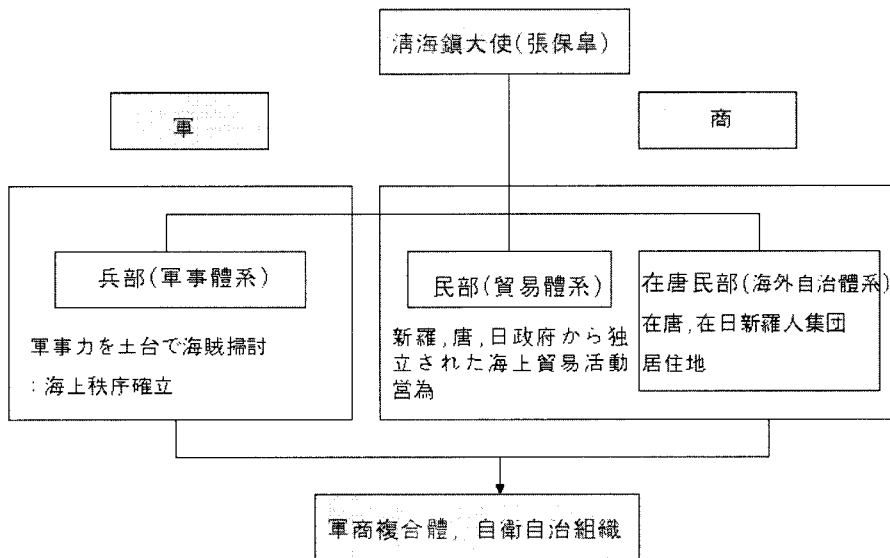
1) 清海鎮の組織体系

張保臯の東北アジア地域の貿易活動の確固たる基盤は新羅の清海鎮であった。この清海鎮の運営と係わった人的ネットワークの構築をするということは、すなわち東北アジアの海洋経営ネットワークを構築するにあたって、その主な機能を遂行することにな

るといふ点である。まず張保臯は興徳王の時代から清海鎮の大使に任命されることになり、清海鎮を取り囲んだ全海上地域についての専権を持つようになった。そういうことで、彼の支持基盤を確保するために努力したものと見られる。

そして張保臯は海上交易活動の円満な遂行をするために、基本的に物的ネットワークの外に、人的な側面でのネットワーク化も必要であったであろう。このように人的な通商ネットワークの構築は、本来、清海鎮の設置の目的である海賊掃討と東北アジアの安全な海上交易路の確保という目標に合わせ、以下のように大体三つの組織に体系化して構成・運営した。すなわち、それは軍事的組織と海上貿易組織、そして唐と日本を含む海外地域を管理する支援組織に分けることができる(<図 2>参照)。

<図 2> 清海鎮の組織体系図



出所：三星經濟研究所，前掲書，p.31.

このような組織は、① 軍事的組織、② 海上貿易組織は中国と日本地域を担当する部署に分けて、③海外経営ないし支援組織としては在唐組織を置いてあって、このように体系化された三つの組織を通じて清海鎮が持っている複合的機能を円滑に

遂行したものと見られる。

このような張保臯の人的ネットワークの形成は、東北アジアの物的ネットワークの構築とともに、一つの全体としての東北アジア地域における海洋ネットワークの完成を意味することであり、このような海洋経営ネットワークの基盤を通じてはじめて張保臯の東北アジアについての古代海上貿易を本格的に遂行することができたという点である。¹⁴⁾

2) 清海鎮の性格

清海鎮の実体的性格については、新羅の半官半民的組織であるということを明確に規定する見解はなかった。このように規定する理由は、清海鎮の二重的機能性のためである。すなわち、清海鎮は新羅朝廷が認めた軍事基地であると同時に、張保臯が個人的に推進した貿易基地であるということである。張保臯が興徳王に清海鎮の設置許可を要請した主な目的は、海賊の掃討にもあった。また新羅朝廷としても海賊の奴婢売買の根絶と沿岸航路および対唐航路の保護が切実に必要でもあった。したがって新羅朝廷は、またその他の軍陣として清海鎮の必要性和、張保臯の経歴および能力を認めたのである。しかし、新羅朝廷が清海鎮の私貿易機能を認めたという記録は見つけにくい。これは、新羅が公貿易以外に私貿易を認めなかったからである。しかし、張保臯の立場としては、新羅朝廷と理解が一致する“海賊掃討という目的”以外に、東アジア“海上貿易制覇”という個人的目的も重要なものであった。張保臯としては、貿易船の安全航海のためにも海賊掃討の必要性が切実であった。したがって、海賊掃討は張保臯の人間的・愛国的目的であっただけでなく、海上貿易という事業目的を実現する重要な手段でもあった。以上のような判断を根拠にして見る時、軍陣としての清海鎮は新羅の公式組織であると言えるが、貿易基地としての清海鎮は民間組織であるとするのが妥当であろう(表 2参照)。

14) 朴明燮 外, “東北アジアの古代海上貿易制度に関する考察,” 前掲論文, p.6.

<表 2> 清海鎮の性格

区分	主唱者	内容	妥当性
新羅の公式組織として認定	一般的見解	<ul style="list-style-type: none"> - 張保臯の要請により設置されたとしても、興徳王が張保臯を清海鎮大使に任命して、1万人の軍を支援したので新羅朝廷が認めた公式組織であるといえる。 	<ul style="list-style-type: none"> - 記録により妥当である。
唐の治外法権的な租借地	金聖吳	<ul style="list-style-type: none"> - 張保臯の‘清海鎮大使’という職は、新羅の官職ではなく、唐の平盧淄青節度使所属の大使である。 - 張保臯は、平盧淄青節度使の指令により帰国して清海鎮を設置した。 - 清海鎮は唐の治外法権的な租借地である。 	<ul style="list-style-type: none"> - ‘大使’という呼称は、唐風官爵という理由だけであるため、‘清海鎮が唐の租借地であると規定しがたい。 - 淄青節度使の指令により張保臯が帰国したという根拠はない。 - 張保臯が淄青節度使所属であれば、法華院も淄青節度使の管轄となるが、これを前提とすると、唐の朝廷から追放された圓仁は法華院に長期滞留することができなかったであろう。
新羅の半官半民間機関	韓国海洋水産開発院	<ul style="list-style-type: none"> - 張保臯の清海鎮設置の動機は、海賊掃討と海上貿易の推進であった。 - 興徳王が清海鎮の設置を許諾し軍の支援をしたのは、海賊掃討のためのものである。 - そのため、清海鎮は新羅朝廷の軍事基地でもあり、張保臯の私貿易基地でもある。 	<ul style="list-style-type: none"> - 清海鎮の海上貿易、すなわち私貿易の機能は新羅朝廷が認めたものとは見がたい。

出所：韓国海洋水産開発院，前掲書，1999.

3) 清海鎮の国際貿易史的な意義

(1) 組織体系の意義

張保臯が構築した海洋貿易の形成により、古代の東北アジア地域に体系的な海上交易組織を置いて、今日の一種の官民混合形態の海外貿易機能を遂行することができた。そして海上輸送と海上交易路の確保という商業的・軍事的側面から複合的機能まで遂行したのは、実に国際化の実践的努力を張保臯の海上勢力により、すでに古代から遂行されたという点が高く評価されると言える。また張保臯商団の国際通商知識と情報力は、当時ではすごく優れていた。単純に貿易業務にだけ携わったのではなく、前述したように、政府間貿易(公貿易)と、公貿易の業務の代行など、各種の商業サービスおよび文化事業にまで兼ねて遂行した。こういうことからでも、張保臯の商団は、その活動領域が国際的であっただけでなく、その活動範囲においても宗教、文化、学術振興および産業発達に大きく寄与したということが分かる。一方、海外に居住している在唐新羅人を一つに縛って、国際貿易に必要な情報を収集するように、“人的・物的な情報ネットワーク・インフラ”を構築した。

また交通と通信が発達していなかった当時の状況において、唐と日本、新羅などの3国をつなぐ人的・物的な情報ネットワークを構築することにより各種の高級情報を収集することがき、短期間でこれらの国家をつなげる民間貿易を展開し、海上貿易網の掌握が可能であった。今日のような情報化時代には、国富の創出のためには通常的な状況で発生する情報以外にも他国で発生する多くの情報をリアルタイムで収集することができる国家間貿易のネットワーク構築が必要であると言える。

(2) 清海鎮の運営における意義

既存の清海鎮に関する論議を総合すれば、現在まで論議された清海鎮運営の実体的性格あるいは清海鎮の所有についての公有・私有の形態に関する区分は、主に張保臯の職することと、それによる主な活動内容(海賊掃討、公・私貿易など)を根拠にしたさまざまな見解に分けられていたことが分かる。しかし、清海鎮を軍事的な機能と分離して、商業的・貿易的な観点を中心に見た時は、新羅の公式組織という見解と新羅の半官半民という見解に大きく分けられる。すなわち、軍事的機能と公貿易という側面では、新羅の公的な所有の形態が海上貿易を中心にした私貿易という側面で、政府所有の形態のように見えるが、実質的には民間が運営している。すなわち、‘半官半民機関’という性格を現わしているものと見られる。すなわち、その頃の公貿易は、

主に貴族の需要により発生した物品を輸入していた。そのかわり、そういう物品を輸入するために、新羅の特産品を輸出していた。したがって、この時は新羅の上流貴族の需要に応じた供給としての機能であると言える公貿易であった。しかし、張保臯の貿易形態は、公貿易から発生される需要ではなく、人口の大部分を占めていた平民の需要に対応するのに容易であり、またより多くの収益を新たにつくるために、‘半官半民の形態’とともに公的所有の形態から脱皮するのがより望ましいということを見せているということが分かる。

IV. おわりに

張保臯を主軸にした清海鎮の運営を通じて、9世紀の韓国・中国・日本の3角貿易を主導して富を新たにつくることのできたこのような海上交易活動により、中国と日本に貿易前進基地を設置し、在唐新羅人の貿易を組織化して東北アジアの海上貿易を活性化させたのは事実であり、また東北アジアの海上貿易発展にも相当な寄与をしたことは確かである。9世紀において、清海鎮のこのような成功的な役目が可能であったことについては、次のように要約することができる。

第一に、張保臯という清海鎮の運営者の人物から、その成功要因を分析することができる。海洋山っ気を土台にして進取的な思考をもって海上勢力の糾合と船団の構成ができるようにした。

第二に、唐で学んだリーダーシップと組織の卓越な運営能力である。そういった能力を清海鎮の運営に取り入れ、新羅・唐・日本の海上勢力を一つの統制権に縛って活用したということは、すなわち国際的感覚をよく活用したと言える。これは唐で学んだ言語と海洋現場感覚を通じて在唐新羅人に信頼感を与え、彼らの協調を受けて効率的なネットワークを形成することができたという点である。

第三に、当時の国際的な政治状況は、清海鎮の設立と運営に有利な環境を造成していたという点である。当時の中国の対外政策は、開放的であり国際的であった。また新羅・唐・日本においては中央政府の権力基盤が弱体化されていたが、その反面、清海鎮を中心にした要衝地を利用して海賊を掃討することができたことにより、沿岸民と漁民に信頼を与えたという点である。

第四に、清海鎮を主とした張保臯の海上勢力は、私兵集団に過ぎないが、中央政府ができない辺方の治安を維持し、民の安全な漁業生活と海上交通の安全性を確保したということである。そしてこれらの海上経験は張保臯船団の長距離運航に大きく役に立った。

清海鎮を通じた海洋貿易活動により海洋領域を確張したし、また民間貿易や富も蓄積したし、さらに海賊を掃討して沿海漁民の生業に活力も与えた。なお周辺国との独自の貿易通路を開拓して善隣友好関係の基盤を造成したが、これにより制海圏確保の大切さを知らせたということである。

海を通じて国益を新たにつくらなければならない今日の時代的状况と国際的な経済与件から見て、清海鎮を中心にした張保臯の海上交易活動は、われわれに相当な意味を与えているし、また多くのことを示唆している。さらに今日の世界経済の中で相当の比重を占めている東北アジア経済圏において、韓・中・日の3国間の経済協力のモデルや基盤の構築をするにあたり、過去、清海鎮が遂行した役目についての歴史的教訓をあらためて考えて見る価値があると言える。

参 考 文 献

- 姜鳳龍, 「韓国海上勢力の形成と移り変わり」, 海上王張保臯記念事業会, 2006.
- 権恵永, “在唐新羅人の対日本に対する貿易活動,” 「韓国古代史研究」, 2003.
- 金聖倍, “張保臯と清海鎮の遺蹟,” 「島嶼文化」, 1998.
- 金聖昊, 「中国進出百濟人の海商活動, 1500年(1・2)」, マルゴンソリ出版社, 1996.
- 金成勲 外, 「張保臯と東北アジア経済の中心戦略」, 博英社, 2005.
- 金在勝, “張保臯の通商ネットワークの現代史的意義,” 「海洋ビジネス」, 第3号, 2004, 6.
- 朴明燮 外, “東北アジア古代 海上貿易制度に関する考察,” 「国際貿易研究」, 第8巻第1号, 2002.
- 朴明燮 外, “張保臯大使の海洋経営モデルに照して見た東北アジアの物流ネットワークの構築方向,” 「海洋ビジネス」, 第4号, 2004.
- 朴明燮, “張保臯の海洋ネットワーク経営の再照明を通じた東北アジアのハーブ港湾の構築に関する研究,” 「貿易商務研究」, 第27巻, 韓国貿易商務学会, 2005.
- 森克己, 「遺唐使」, 至文堂, 1966.
- 三星経済研究所, 「千年前のグローバルCEO, 海商王の張保臯」, SERI研究エッセイ, 2005.
- 徐青錫・朴鉉瑀, 「韓国貿易論」, 法経社, 1994.
- 李成市, 「東アジアの王権と交易」, 青木書店, 1999.
- 韓国海洋水産開発院, 「張保臯の海上活動の再照明と21世紀の海洋思想の鼓吹方向」, 韓国海洋水産開発院, 1998.
- http://www.changpogo.or.kr/main.asp?CMenu=1&Cgubun=1&CPage=depth_03_01.html

ABSTRACT

A Study on Maritime Trade between Korea, China and Japan in the CheongHaeJin of the 9th Century

Han, Nak Hyun · Park, Myong Sop · Kim, Byung Jo

This paper has focusing CheongHaeJin's maritime trading activities between Korea, China and Japan in the 9th century. In operation of CheongHaeJin which Chang BoGo was given a key role, CheongHaeJin creates three nation's wealth in triangular trade among Korea, China and Japan.

And also, CheongHaeJin's contribution is considerable to the maritime trade development of Northeast Asia through establishing trading advance base in China and Japan, and organizing Shilla's people in China. Chang BoGo justified the control over small business groups of the west and south sea of Korea and the east and south sea of China by keeping pirates away. His trade groups controlled foreign trade of three countries: Shilla, the Dang Dynasty of China and Japan. They connected Persia, India, Southeast Asia, and China.

CheongHaeJin's key success factors of the maritime activities are summarized as follows;

There is a possibility of searching that successful factor from the people of operator of CheongHaeJin. Based on oceanic adventurous spirit with character and progressive thinking could complete the rally of sea influence and composition of fleets.

Secondly, the success factor is the excellent operational ability and leadership which learned in the Dang Dynasty of China.

Thirdly, In 9th century, International political context was suitable

for CheongHaeJin's construction and operation. Such political circumstances had given to CheongHaeJin remunerative position.

Finally, Although central government could not maintain the sea traffic securities, Chang BoGo's ocean trading fleets guaranteed the safe fishing industry of people and security of sea traffic.

Key Words : CheongHaeJin, Maritime Trade, Chang BoGo